編 集 後 記

今年は，6月下旬から7月下旬にかけて，横浜と新潟の会場を使って，JAPAN KIDNEY WEEK 2005 が「未来を拓く」をテーマとして，日本腎臓学会と日本透析医学会の共催で開かれた．

その中の特別企画に「慢性腎臓病の克服をめざして」というシンポジウムがあった．米国から招聘された Dr. Eknoyan は，全世界で維持透析を受けている患者数は，1990 年に 426,000 名であったものが，2000 年には 1,490,000 名となり，さらに，僅か 5 年後の 2010 年には 2,500,000 名に達するだろうと推測していた．

末期腎不全の原因疾患で急速に増加しつつあるのは，生活習慣病である糖尿病による糖尿病性腎症，高血圧や高脂血症による腎硬化症であり，かつ，透析導入年齢の高齢化をも伴っている．これらの疾患の予防と適切な治療を行うためには，患者の正しい理解と協力がなければ，最終目標に到達することはできないであろう．同じような目的の事業は本医会でもすでに発足しているがその道は遠い．

本号では，「透析医療の Current Topics 2005」として，高齢者の透析治療にかかわる問題点をも視野に入れた，透析の質や量を主体に多くの専門家諸兄からいただいた論文を掲載している．なお，残念ながら東京女子医大 秋葉隆先生の「透析の質と量の決定因子と予後との関連」は論文未着のため今号に掲載することができなかったが，次号 20 巻 3 号（12 月末発刊）に掲載を予定している．そのほか，透析治療の現場で発生した諸問題について，すぐ応用できるような解答を伴った論文が多数投稿されている．

「透析医のひとりごと」や支部だよりには，わが国の医療の現状に関する危機感のあふれた内容のものが多く見られている．最近，某大新聞に，虎ノ門病院泌尿器科部長の小松先生が投稿された「国民的会議で医療崩壊を防げ」という一文がある．それによると，医師は医療に限界があるだけでなく，危険であると思っている．適切な医療が実施されても，結果として患者に障害をもたらすことも少なくない．また，同じ医療を行っても結果は患者によって異なるばかりでなく，同じ患者でも時によって違うことさえある．医療に 100% 安全を期待する患者側の認識と大きなずれがある．その認識のずれをもってマスコミ，警察，司法などから医師は不当に攻撃されていると感じ，多くの医師や看護師が勤労意欲を失っている．また医療費の抑制は英国での失敗事例を参考にしていない……などである．そして医療について国家的会議を招集して国民的な合意形成を計るべきだと提案している．重要なポイントを指摘されたように思う．わが国の医療が崩壊しないように，まず，患者やその家族に，現状を正しく理解してもらうような努力を惜しまないようにしたい．

広報委員会委員　北 本　　清